

★巻頭言★

Vol.18 No.1の刊行にあたって

ゲームやコミックで人気のある冒険ファンタジーで、勇者や剣士と並んで欠かせないキャラクターは、やはり魔法使いではないか。「指輪物語」「ゲド戦記」「ナルニア国ものがたり」などの古典はもとより、ジブリ作品にも「魔法の宅急便」「ハウルの動く城」「ゲド戦記」「アーヤと魔法」には魔法使いが登場する。この魔法ファンタジーの世界が、子どもたちにとってかけがえのない意味をもつと、脇明子『魔法ファンタジーの世界』（岩波新書、2006年）は述べる。

「幼稚園や保育園時代に、絵本だけでなく昔話やファンタジー作品もたくさん読んでもらい、物語の世界に入りこむというのがどんなに楽しいものを、心底から実感していれば、そんな抵抗は起こらない。たぶんそういう子どもたちは、たとえ小学校に進んで常識の鎧をまといはじめても、物語を楽しむときにはそれを脱ぎ捨てるか、少なくとも紐をゆるめて身体を楽にするもんだということを、自然に理解しているのだろう。だが、そんな幸せな子どもは少数派で、想像力を全開にして物語の世界に入る楽しみを知らないまま小学生になった子どもたちは、獲得した常識に反するものに抵抗を示し。ファンタジーとしての設定が作品ごとにちがったりすると、納得できないという顔をしがちだ。」(pp.8-9)

脇明子は中沢新一の「カイエ・ソバージュ」や『指輪物語』『ゲド戦記』などの作品を引きながら、ファンタジーの喜びを支えるものが「具体性の世界」であり、「宇宙の中で拘束を受けながら生きている人間の条件」（中沢）だと指

摘している。優れたファンタジー作品にはリアリティがあり、現実嫌悪や現実逃避とは異なる「五感の体験」がもたらす「成長が実感できる物語の力」や「嘘をつかずに希望を語る物語」があるというのである。

「現実の世界のなかに、愛するに足る人間や風景、動植物などを見出し、それを物語のなかに活かすことのできる作家は、その愛を読み手に手渡し、いつかその『本物』に出会ったときに、心からの願いが現実になったかのような深い喜びを与えてくれる。『鹿踊りのはじまり』を知らずにその夕焼けを見たとしても、もちろんその美しさに感動はしただろうが、風に鳴るブナの声までが記憶に焼きつくほどの喜びは味わえなかったのではないだろうか。それを可能にしたのは、はんの木のむこうに夕日が沈む光景の美しさを見事に活かしきった物語の力だ。私にはそれが、物語に出てくるどんな魔法よりも、さらに不思議で美しい魔法のように思えてならない。」(p.201)

例えば、「ひもじさをしずめるパン」「かわきをとめる泉」のように、ふつうに考えれば「なんの不思議もない」「あたりまえのこと」が物語（ファンタジーの世界）で「秘密めいた魔法の言葉のように感じられる」のである。「食べる」という行為を通して「自分の心からの願いに気づき。この世界のいろんな美しさに目を開かれ、ただのパンや水を魔法の食べものや飲みものに変えるすべを知れば、人生はどれほど豊かになること」だろう。

私たちは新しい物語を「語る」ことを通して、共生社会のあり方を考えられないだろうか。人間が主体性（自我）を持って自然に働きかけ、それを作り変えてきた結果が「いま」であり、この不都合な「いま」を変えるとすれば私たちの主体性に問いかねなければならない。物語は、決して現実逃避でも、荒唐無稽なものでもなく、人々の意識に深く働きかけるものであると考えれば、科学もそれを無視することはできない。

2024年5月

共生社会システム学会

会長 朝岡 幸彦